

「自ら考え、進んで学習に取り組む児童の育成」
～国語科における単元を貫く言語活動を通して～

I 研究の内容

1 研究の具体的内容と方法

(1) 授業づくり

- ア 児童の実態把握，学力検査の実施と分析
- イ 授業の工夫や改善のための指導法を探るための理論研究・学習会
- ウ 主体的に取り組む態度・意欲を育てるための評価の工夫
- エ 授業実践

(2) 集団づくり

- ア 日常的な学習環境づくり
 - ・「朝の基礎学習」の指導内容と指導法の統一
 - ・家庭学習や学習規律の確立
- イ Q-U調査の実施（2回）と調査の全職員による分析
 - ・学級の実態や課題を明らかにし，指導目標や指導方針を明らかにする。
- ウ 分析を生かした学級集団づくりへの取り組み。
 - ・発達の段階に合わせ，互いに認め合い高めあえる活動を設定し，評価する。

2 研究実践

(1) 学習会

- ア 「ハイパーQ-Uの結果の分析方法と活用について」
甲州市スクールカウンセラー 長尾雅裕先生
 - ・分析方法の学習を基に，全学年の分析と対策，方針を立てた。
- イ 「育てるカウンセリングと対話のある授業」
甲州市スクールカウンセラー 長尾雅裕先生
 - ・カウンセラーの助言を基に，児童の課題把握と対策を立て，学習環境について学校全体で統一して取り組む内容を検討し，実施した。
- ウ 「単元を貫く言語活動を位置づけた国語科の授業づくり」
～子どもたちが主体的に思考し，判断し，表現する授業づくりをめざして～
峡東教育事務所 柴田幸也指導主事

(2) 研究授業

- 第3学年 国語科「くふうでへんしん！食べ物紙しばいを作ろう」
飯室 美華教諭
指導助言 峡東教育事務所主幹指導主事 小林 俊彦先生
- 第4学年 国語科
「アップとルーズを使って、『仕事リーフレット』で伝えよう」
三森 明美教諭
指導助言 峡東教育事務所主幹指導主事 小林 俊彦先生

(3) 実践授業

- 第1学年国語科「しらべよう！はたらくじどう車のひみつ」 廣瀬みどり教諭
- 第2学年国語科「わかりやすいせつめいのしかたを見つけよう」 廣瀬きよ美教諭
- 第5学年国語科 「グラフや表を引用して書こう」 金井 巖教諭
- いちよう学級国語科「豊かな言葉の使い手になろう」 若月美乃里教諭
- 第6学年国語科 「絵のよさを伝える解説文を書こう」 水上 由人教諭

II 成果と課題

1 授業づくり

- 理論学習などを通してどう授業を組み立てていくかが理解され、より工夫された授業実践になった。取り入れる言語活動についても、児童の実態をよく考慮した様々な工夫を取り入れた授業が行われた。その結果、「自分の考えや感想をもつこと」や「自分の考えを発表すること」に対して意欲面で大きな成果が見られた。
- 他学年にわたり成果物を展示したり見せ合ったりしたことで、子ども達に次年度の学習の見通しと関心をもたせることができた。また、保護者を巻き込んでの取材協力や成果物閲覧などによって、能動的な学習となり児童の意欲関心も高まった。
- 説明文だけでなく、他の領域においても単元を貫く言語活動をいつも念頭に置きながら、「ねらい」や課題を把握させる授業を仕組むことで、子ども達も授業に対して目的意識をもち意欲的に取り組むようになった。
- 人の意見に耳を傾け関心をもち聞けるようになってきた。しかし、十分とはいえず、児童の自己評価もより厳しくなっている。聴き合う指導を続けていく必要がある。
- 文章を「書くこと」については、ねらいを達成するために、児童にあった言語活動の工夫が必要である。

2 集団づくり

(1) 日常的な学習環境づくり

- 全校で学習環境を整えるための統一した取組ができた。
 - ・教室の前面の掲示物をなくし、子どもが集中して学習に取り組めるようにした。
 - ・学習用具や学習規律を全職員で検討し、全校で統一した指導を進めることができた。保護者にも学年部会で配布して協力をお願いすることで同一歩調での指導ができた。
 - ・全国学力学習状況調査の児童の意識調査から明らかになった「課題提示に対する意識が低い」という結果に対する対策として、「めあて」「まとめ」「ふりかえり」という授業のステップを明確にするカードを、全学年で共通して使用した。これにより、子ども達が見通しをもって授業に臨み、学習意欲の向上にもつながった。
 - ・国語辞書の一人一冊、辞書引きへの取組ができた。
 - ・個の考えを表現させたり話し合いに使用したりするために、ホワイトボードを全校児童分用意した。いろいろな教科や学習場面で活用することができた。

(2) Q-U調査の実施と全職員による分析

- 本校独自に早い時期に長尾先生を講師にお願いし、ハイパーQ-Uの結果の分析方法を学ぶことができた。それにより、分析とQ-Uに対する理解が深まり、分析時間も短縮できた。
- Q-Uの結果の考察をもとに、具体的な方策等を考え実践することができた。分析のために研究の時間が多く必要であったが、全職員が客観的に学級集団を分析し、よりよくするための対応策を出し合ったことは、大変有意義であった。互いの実践経験を出し合うことで学級集団づくりについて学び、職員全員で考えることで全校児童について共通理解をはかり育てていく意識と体制をつくっていくことにもつながった。

(3) 分析を生かした学級集団づくりへの取組

- 2回のQ-U結果を活かして、個々の子どもへの配慮を考えた学級集団づくりに取り組み、学級の課題と取組の成果を検証することができた。その結果、全ての学年において、改善が見られた。

III 成果物

- 1 研究授業、授業実践の指導案 8点 (ワークシート等も含む)
- 2 学習用具のきまり (各学年)
- 3 授業改善のための「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の表示カード

(研究主任 廣瀬きよ美)